トピック

第 6 回アジアオセアニア肥満学会印象記

独立行政法人国立病院機構 京都医療センター 予防医学
綾部　誠也

第 6 回アジアオセアニア肥満学会年次集会（6th Asia-Oceania Conference on Obesity）は，2011年 8 月31日から 9 月 2 日まで，フィリピン共和国の首都マニラにて開催された．今年度の大会では，アジアオセアニア地域の肥満とメタボリックシンドローム（The Growing Problem of Obesity and Metabolic Syndrome: Asia-Oceania Perspective）に焦点が当てられた大会であった．会場となったSofitel Philippine Plaza Manilaは，マニラ中心部に近く，マニラ湾を一望できる場所であった．大会スタッフのホスピタリティーも手伝って，厳格な中にも優雅で和やかな雰囲気の中でプログラムが進行した．

大会は，8月31日の早朝6時30分からの“BREAKFAST SYMPOSIUM”を皮切りに，国内外の研究者によるシンポジウムを中心に，3 日間を通して興味深い講演が続いた．講演者や参加者の多くがフィリピン国内の医療従事者や研究者との印象を受けたが，日本からも，松澤佑次先生が講演（Adipocyte Biology : The Fat Cell Cross- talking to Distant Organs by Secreting Adipocytokines），津下一代先生が講演（New Strategy on Prevention on Lifestyle related Diseases Focusing on Metabolic Syndrome in Japan）をされ，井上修二先生と下村伊一郎先生が座長を務められた．また，筆者を含めた 3 名の日本人研究者が口頭セッションで研究成果を発表した．加えて，日本の研究者のポスター発表も散見され，大会全体を通しての日本からの研究者の貢献が感じられた．

稿を終えるにあたり，今回の第 6 回アジアオセアニア肥満学会参加に際して，トラベルグラントとして支援を頂きました日本肥満学会・中尾一和理事長はじめ諸先生方，そして，多くのご指導を頂きました坂根直樹先生ならびに共同研究者の先生方に心より御礼申し上げます．

東京福祉大学心理学部
齋藤　瞳

第 6 回アジアオセアニア肥満学会（6th Asia-Oceania Conference on Obesity）が2011年 8 月31日から 9 月 2 日の 3 日間，フィリピンのマニラで開催されました．

筆者は，「The relationship between psychological factors and weight loss using Personal Health Record」という題目で，心理特性や動機の程度を考慮したWeb版減量プログラムの成果発表を行いました．質疑応答では，心理特性を把握する心理検査など本プログラムの国際的応用可能性，パソコンや携帯電話などインターネットを用いたプログラムの有用性と限界についてディスカッションし，今後の研究に有用な示唆をいただくことが出来ました．また，プログラム終了後も，肥満医療における心理学的観点の重要性や心理士のあり方についてなど意見を交わす機会があり，各国の現状や今後の課題など視野が広がると同時に，研究・臨床活動について深く考えさせられました．

今回の学会では，肥満・メタボリックシンドロームを中心とした慢性疾患の現状や対策について，医学･栄養学･運動学など幅広い分野から報告がなされ討論が行われました．心理学を専門とする筆者は，行動変容に焦点をあてた認知行動療法的アプローチに関連し

た内容を興味深く拝聴させていただきました．現在，国際的には肥満治療において外科手術が注目されている印象があります．しかし，いずれの療法にも長所と短所があります．そのため，慢性疾患対策においても今後は，各療法の長所を生かし短所を補い合うために，それぞれの分野の専門家が連携していくことが求められているのではないでしょうか．

筆者にとって，国際学会の醍醐味の１つは国を超えて様々な分野の方と話をさせていただく機会があることです．立場に関係なく，研究を通して意見交換することで，視野が広がり新たな着想を得ることが出来ます．アジアオセアニア肥満学会は，前回インドのムンバイで開催された際に，演題が登録されていないというトラブルを経験したこともあり，苦い思い出となっていました．しかし，今回の学会でそのイメージは払拭され，今後も継続して参加させていただきたいとの思いを新たにしました．

国際学会のもう１つの醍醐味は，開催地の人々・文化に触れることです．今回も，発表が縁で知り合った方と一緒に，フィリピンの街を散策し，文化・歴史を学ばせていただく機会を得ました．そして，アジアと一口に言っても，肥満をめぐる意識，生活習慣，経済状況には，それぞれの事情があることを体感したのでした．

最後になりましたが「日本肥満学会トラベルグラント」申請に際し，筆者を推薦して下さいました評議員の坂根直樹先生，選出して下さいました日本肥満学会諸先生方に深甚なる感謝を申し上げます．

写真：プレゼンテーションの様子

北海道大学大学院 医学研究科

米代　武司

第6回アジアオセアニア肥満学会（AOCO 2011）が2011年８月31日から９月２日までの３日間，フィリピンのマニラで開催されました（写真）．渡航前は治安の悪さを懸念しましたが，親切なフィリピン人も多く（マニラ市内で道に迷い立ち往生していると地元の方が道を教えにきてくれるなど），快適に過ごすことができました．

本会では基調講演や一般演題など合わせて130題ほどの発表があり，松澤佑次先生がAdipocyte Biology：The Fat Cell Cross-Talking to Distant Organs by Secreting Adipocytokinesと題するPlenary Lectureをされたのをはじめ，中尾一和先生，井上修二先生，下村伊一郎先生，津下一代先生がシンポジストや座長として参加されておられました．他にも日本から４題の一般演題発表があり，私はカプサイシン類縁体の代謝亢進作用におけるヒト褐色脂肪組織の関与についてポスター発表をしました．

写真：第６回アジアオセアニア肥満学会の様子

シンポジウムでは，肥満やメタボリックシンドロームの疫学，病理・病態や食事・運動介入法などに関するテーマが取り上げられていましたが，アジアオセアニアを一括りにせず，各国の民族的特徴を意識した講演が多いのが印象的でした．また，本会では日本人女性のBody Imageが過剰な痩せ志向の典型例として何度も話題にあがり，今後，肥満のみならず痩せ・痩せ志向による健康リスクとその対策を考える上で，日本での臨床研究が大切になるであろうと強く感じました．

最終日には学会中に知り合ったフィリピン大学のN. Juban博士の研究室へ今井具子先生（同志社女子大学）と一緒に訪問し，肥満の疫学に関するお話をお聞きしたあと，大学内を案内していただきました．予定外の貴重な見聞をすることができました．今回の会議ではアジアオセアニア諸国の多くの肥満研究者と意見交換をすることができ，世界会議などとはまた違ったアジアオセアニア同士の不思議な一体感と親近感を感じるとともに，今後の研究への意欲をお互いに高め合うことが出来たように思います．

終わりに，今回の会議に参加するための渡航奨学金を付与していただきました日本肥満学会に心よりお礼申し上げます．